

あそ

4

2020



日比谷公園

須賀忠男のBird Note



小群で
航空公園に
戻って来るようになった
イカル
すぐ立ち去る
又来年まで
見る事が無いか？

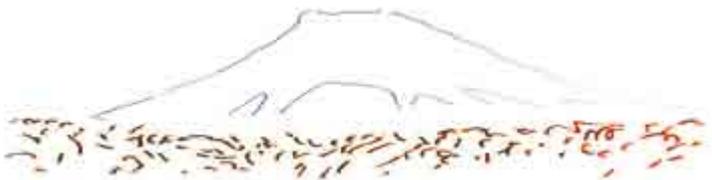
四月集

佐藤 喜孝

くれなゐ

よき年と伸ばせば光るお餅かな
春の山ぐるぐる路がついてゐる
葫と細魚を前にベジタリアン
鶯の喉は空気清浄機

春闌くる紅に重ねるちがふ紅
十一月眞紅に見えたレントゲン
紅塵の外に杖突く花霞
母の差す愛嬌紅は秋の暮
花はくれなゐ一度きりならそれまでよ
曼珠沙華天が紅とはちがふ色
油紅抱へし人とこの櫻
水墨の紅い椿と白椿



東京 七郎衛門吉保

越中

雪少なアザラシに似る山の肌
雪吊の袴行列越中路
風雪のなく無沙汰なり屋敷森
冬涛のない氷見の海無言なり
里神楽村に活気のUターン

東京 篠田純子

A T M

うららかやA T Mに急かれゐて
正体の知れぬウイルス風信子
涙ごゑの最後の校歌柳の芽
はこべら旨し蒨葎草に混じりゐて
危険行為にホイッスル豆撒き中断

東京 篠田 大佳

雑踏

雑踏のひとつとなりてマスクかな
マンションの搬出作業二月かな
沈黙の街の口笛あたたかし
ウイルスニケガレテキテモ春ノ風
コンビニに過労の男咳きぬ

石川 定梶じよう

雀の子

トラックが子豚搬送春二番
春雷や点滴注射あとすこし
引鳥のさびしらを子が言ひにけり
てふてふが元気でこぼこ宙のぼる
井のほとり此処が大好き雀の子



東京

須賀 敏子

春一番

急がずにこなせる予定犬ふぐり
遠富士や柳瀬川畔に犬ふぐり
垂れ梅 武蔵野線の貨車続く
春一番 建設クレーン伸びしまま
咲月高校受験
合格を受けて「LINE」の賑やかに

東京

田中 藤穂

芽吹く

ランナーのピンクのシューズ 榆芽吹く
薄氷を指にて割るを待つ雀
花菜売る隣り古着屋お縁日
義姉の訃や夜更けの霏降りつる
柳絮飛ぶ武漢の風邪は拡がれり

三重

長崎 桂子

春隣

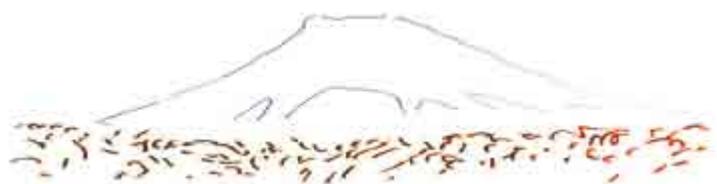
がんばれと囃し立て拍手春隣
朝ぼらけ裸木並木墨絵めく
焼芋を池で洗ふモンキーセンター
片隅の日向に子雀集ひをり
気を付けて嗽手洗ひ寒戻る

東京

森 なほ子

如月

薄日さす冬薔薇の刺あらはなる
一隅に芽吹くものある玻璃戸かな
犬猫の募金にコイン迷ふ春
料峭や磨き上げた靴並べ
枝揺れて初音一声残しけり



東京

赤座 典子

河口湖

春暁の富士大きかり露天の湯
うららかや倦かず眺むる逆さ富士
夕影の富士の雪間の拡がりぬ
暖かや乗客溢る遊覧船
春日を娘に誘はれて富士見宿

埼玉

秋川 泉

春の富士

靴の子も下駄の子もあり春の泥
夕暮れに三毛猫の来る水仙花
チューリップ花芽の上で眠る猫
夕闇に広がりてある春の富士
長き夜スノームーンに手を広ぐ

埼玉

大日向幸江

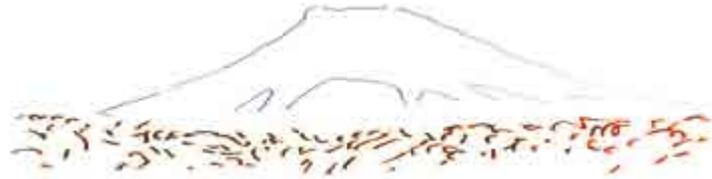
暮遅し

ヒヤシンス三本束ね店先に
蝶々と同じ早さの散歩道
リクルートスーツ重たし春の雨
暮遅し世話する猫の遊び癖
公園の池の浚渫風光る

水中花

佐藤 恭子

水中花昨日今日又明日かな
春の雨しのび入りたる鐘撞堂
夕焼や水面油絵のやうに映ゆ
こめかみに青筋見ゆる冬の蝶
加賀町の堀より高く芽吹く木々



春の島案外海は退屈だ 佐藤 喜孝

友の名を思ひ出せずや返り花 大日向幸江

真似事の茶の湯なれども淑気たつ 七郎衛門吉保

寒紅や義母の煙草のフィルター 篠田 純子

駅にゐて迷子の子より初電話 篠田 大佳

スコップの突きさしてある雪月夜 定梶じょう

山茶花の垣根の奥の小児科医 須賀 敏子



一卓で読む書く食す去年今年 田中 藤穂

掛声の増える日日なり去年今年 長崎 桂子

初詣締めは近くの社にて 森 なほ子

若緑 藤井七段 運動靴 赤座 典子

初春やバラ色のほほルノアール 秋川 泉

明るくてくらくて水槽のいわし 佐藤 恭子

喜孝 抄



濃淡を霧の意のまま湖の島

佐藤 喜孝

作者はご家族で昨年、北海道の旅をされたと伺っている。とするとこの湖は洞爺湖、屈斜路湖、摩周湖、はたまた阿寒湖か。そしてこれらの湖には中島があり、他の地で見える湖とは異なつた景色を見せてくれる。併せてここでは霧が付き物。摩周湖には二度足を運んでいるが、流行り歌と同じく、霧の湖であつた。その霧の濃淡が変化し、中島が見えたり隠れたり景色を思い出す。(吉保)

寒菊の紫苦しもつてのほか

大日向幸江

秋の山形を紹介する食材として、食用菊の「もつてのほか」は、欠かすことは出来ないところ。「天皇の御紋である菊の花を食べるとはもつてのほか」が語源とも言われているが、「思っていたよりもずつとおいしい」の方を私は好む。かの松尾芭蕉も、菊を食すること好んだとあり、滋賀県大津の堅田の地で詠んだ「蝶も来て酢を吸う菊の膾かな」の一句があつた。(吉保)

新橋の旧停車場の冬木立

須賀 敏子

明治5年に開通した鉄道、新橋―横浜間の始発駅が、新橋停車場跡として再現されている。旧駅

舎を復元した建物は、明治の意気込みを感じさせる堂々としたもので、鉄道歴史展示室としても使われている。ビルの谷間にあるレトロな一角、スペースの貴重な広場だが、多くの冬木立が枝を張っていた。その枝ぶりからも、明治改革の意欲風なものを感じたのは、私だけだろうか。(吉保)

地球儀を欲りつつ過ぐる十二月

田中 藤穂

地球儀を欲しがつたのは、作者ご自身ですか。だとしたら九十歳を超えて、なお矍鑠とされている源の、一端を垣間見られたように思う。地球儀をグルグル回して、何をつかみ取るうとしているのだろうか。知識？未知への興味？観察力？空想？思い出？宇宙？ いや何でもいいのだろう。地球儀はこれらを提供してくれる、不思議な力を持ち合わせているようにも見える。(吉保)

冬霞挽茶羊羹色の河

森 なほ子

昨年の汐留サイト吟行の折、高層ビル汐留サイト展望室より、東京湾方面の景色を見下ろすことが出来た。隅田川と、その水を引き込んで、浜離宮を囲む運河。冬霞を通して見える景色に透明感はない。河はそこに、羊羹を何本か置いたかに見える。そしてその色は抹茶でもなく、黒糖でもなく、小倉でもなく、正しく挽茶色だった。グーグルマップの航空図でもそのように見える。(吉保)

海老天のみ購ふ爺や大晦日

篠田 大佳

このコメントを書くために、愛用本の大晦日とか、年越しとかの頁を見ていたら、作者の一句「コンビニで年越しの声聞きにけり」が掲載されているのを見つけた。この爺もやはりコンビニなのだろうか。この一句から高齢化、核家族化、少食化、そして食材提供の多様化などを見る事ができる。十年以上前からその観察眼を持っている作者に、感心しきりである。(吉保)

およながよなどと蜜柑の皮溜まる

佐藤 喜孝

「御夜長」という雅な言葉を知りませんでした。夜食の意味のようです。「御夜長」などと言いながら蜜柑をつい沢山食べてしまう様子が伝わってきます。一度この言葉を使って、友達を驚かせてみたいものです。語彙が増えました。(典子)

天に抜けビルの乱立年迫る

秋川 泉

ビルの建設ラッシュは、東京オリンピックを見込んで、ますます勢いです。まして年末には拍車がかかります。作者はその様子を、天に抜けるほどと詠んでいます。至る所に高層ビルが出現し、東京の空がますます見えにくくなるような気がします。(典子)

裸木は電飾巻かれ昼の月

篠田 純子

すっかり葉の落ちた木には、時節柄電飾が巻かれています。頼りなく光る月と、寒々しく光る電

飾の取り合わせ。しっかりと切り取られた風景が、額の中の絵のようです。純子さんの目の付け所には、いつもながら感服です。(典子)

冬菜青くひとりの日々のある日茹づ

定梶じょう

おひとりで調理することになって、冬菜を茹でることに。青々と新鮮な葉の様子とも、ゆでて一瞬に深い青に変わった様子とも、どちらにも読めるのですが、やはり青が美しいのは、茹でたての小松菜でしょうか。(典子)

寄鍋や舌鼓して明日の備へ

長崎 桂子

鍋は、寒い時にはすぐに暖まるので、大歓迎です。家族の好みの具を色々取り揃えて、楽しんでいきます。疲れた時も、明日への元気の為にも、特に寄鍋にはよく助けてもらいます。頼りすぎてはいけないと思いつつ。(典子)

木枯の抜け道にありステーション

七郎衛門吉保

木枯の吹いてゐる抜け道の先に駅がある、と詠むのが妥当。だが、他の読み方をしてみたい。「にあり」のあるのは「ステーション」ではなく「木枯」。抜け道を通った時に、「木枯」の吹いてゐるのを覚えた。ステーションと云ふ古風な云ひ方、抜け道・木枯と魅力的な組合せである。英語

の「駅」が現在のステーションに至るまでさまざまな表記が使われた。おもしろいので書き留めてみた。「ステイション」(中井桜洲)・「ステーション」(仮名垣魯文)・「ステーション」(末広鉄腸)。そしてこの句の「ステーション」は歌舞伎「繰返開花婦見月」くりかえすかいかのふみつきで使はれたとあった。(喜孝)

しあわせを説く人の行く冬の街

赤座 典子

自分が信じる宗教を他人に勧めるためであらう。グループで来て何ごとか打ち合はせると、数人ずつに分かれ街に散っていく。そんな光景に遭遇したことがある。ドアホンが鳴ったので仕事の手を止めてドアを開けるとにこやかなお顔の人に宗教を勧められる。あるときは貴方のやうな惰性的な生活をしてみると幸せになりませんかとまで云はれてしまった。怒るやら可笑しいやら。「冬の街」がその行動のさむざむしさを象徴してゐる。(喜孝)

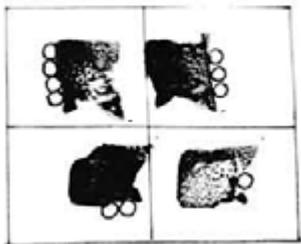
悪筆

大日向幸江

筆記用具はその時々的心を顕わにする。哀しい時は筆圧は弱々しく怒り狂う。字は乱暴な字となる。又筆記用具も多彩で気持ちを表すことに不自由はしない。しかし悪筆な私には関係ないかも？



佐藤喜孝



七郎富田保

厚底のシューズの走り春動く
手洗は絶対よと妻マスク越し
春一番羽毛舞ふよに雲一つ

◎東京オリンピックのマラソン選手を決めるレースの話題で賑ったことが、コロナ騒ぎではるか昔のやうな気がする。その折、メーカーの努力で速く走れるマラソンシューズが話題になった。「厚底のシューズ」はそのことを云つてゐる。

角川版大歳時記には「春めく」の副題として(春動く・春ぎざす)があるが、例句は「春めく」しかない。後発の講談社版大歳時記でも同じことであつた。「俳誌のサロン」には八十二句集められてゐる。近頃使ひはじめられた季語のやうだ。

てのひらの海星紅いろ春動く	鎌倉喜久恵
肩紐は頼りなきもの春動く	篠田 純子
だしぬけに目白くるなり春動く	早崎 泰江
春動くジャズの流れる歯科医院	篠田 純子
リハビリのいっちにいさんし春動く	篠田 純子
春うごく水のたまりし膝小僧	佐藤 喜孝
女の触角男の触覚春うごく	佐藤 喜孝
メダル獲るママアスリートに春動く	七郎衛門吉保

吉保さんは「走り」から「春動く」を選ばれたのかも知れない。

◎前句で話題にしたコロナウイルスを題材にされた句。夫婦間は云ふに及ばず、子や孫にも口を酸っぱく注意されてゐることであらう。注意しすぎることはない。人と人との間を隔てるだけではなく、社会を壊し命を奪ふ本当に怖ろしいウイルスである。この句の「マスク」は季語の働きを超えてしまった。

◎「春一番」は「春一」とも云ひ強い南風で長崎地方の漁師に恐れられてゐた。キャンディーズの『春一番』で「へもうすぐ春ですね、恋をしてみませんか」と唄はれ「春一番」がイメージチェンジしてしまった、とテレビの受け売り。

この句の風は「羽毛舞ふよに」で漁師の恐れた風ではなくキャンディーズの風。「舞ふよに」は詰めすぎの感あり。

森 なほ子

眼下より街の音する梅の山
梅園に固く閉ざし聴雨庵
甘酒を吹いては啜り梅日和

◎梅処で知られた京王線の「百草園」もさう云はれば梅の山である。この大掴みな「梅の山」のよさを「眼下より」が細かすぎ消してゐる。

◎聴雨庵は何所にあるか知らぬが、梅見客で賑つてゐる所に、ひっそり？とある庵の名前に魅かれた。調べてみると池上梅園の茶室とか。今はコロナウイルスの感染防止のため当面利用中止にしたとあった。

◎日和と云つても梅日和はじつとしてゐると寒い。梅園の甘酒ではるか昔のことを思ひだした。まだ酒を飲んではいけない頃、おじさんおばさん達と百草園に吟行に行った。呻吟してゐると「辛い甘酒を買ってきて」と頼まれた。疑ひもせずそのまま茶店の人に……。懐かしい思ひ出である。

料峭や 駅へと下る 五十段

としまえん 閉園ときく 春寒し

春服の子のきて 試験終りしと

◎作者名があり作者を知る者には、ああ、あの駅のあの礎ねと想像できるが、作者名を知らないで読む者にはどのやうなイメージを持つてもらへるか、と考へて作るのだが、十七音の中では難しい時もある。作句場所やきっかけなどを前書に頼ると報告に傾いた句になりがち。短詩故の難しさがある。「料峭や田端の駅舎谷の底」とか、固有名詞を入れて作るのもあつてよいかも知れない。

◎わたしもこのニュースを聞いた時なぜと驚いた。一部はハリー・ポッターのテーマパークに、残りも東京都が買ひ災害時の避難場所にもなる大規模公園を作る計画だとか。

楽しいことや哀しいことに合はせる季語は気を付けねばならない。掲句のやうな時は「寒し」「温か」など感情表現の一翼を担ふ季語は避けた方が無難である。

◎幼稚園から大学、そして会社まで試験の連続である。当人は勿論、回りの人も一喜一憂する春。この句は結果のお知らせではなく、試験を済ませたと知らせに來た。明るい配色の「春服」は全力を出し切った充実感のあらはれである。きっと結果もよいことであらう。

寒明けの 鈴鹿連峰 町動く

フレイルを 日日心がけ 春兆す

春空に ロケット 間直ぐ 国守る

◎桂子さんのところから鈴鹿山脈が望めるのだらう。その鈴鹿連峰も寒の明ける頃は何となく春の兆しが匂ふのであらう。麓の町も鈴鹿連峰と同じく寒明けとともに活気が戻ってきた。「町動く」がおもしろい。

◎フレイル？、知らぬ言葉が出てきた。電子辞書にも出てない。スマホに向かつて「フレイル」と云ってみた。「フレイルは日本老年医学学会が二〇一四年に提唱した概念で Frailty(虚弱)の日本語訳(？筆者) 健康な状態と要介護状態の中間に位置し、身体的機能や認知機能の低下が見られる状態のことを指す」とのこと。この句の「フレイル」とはすこし違ふやうだがフレイル状態を自覚して日日を注意して過ごされた。春兆す頃になりほつとされた心持ちが伝はる。

◎日本のロケットは平和利用と云はれてゐる。さまざまな目的を持つて種子島から衛星を乗せて打ち上げられてゐる。「みちびき」・「こうのとり」と名前もおもしろい。「はやぶさ二号」も年末に地球に戻る。リュウグウと名付けた星に行ったら玉手箱のやうに四角かった。命名者の千里眼にびっくり。

これらの平和利用と称するロケットが桂子さんは「国守る」と感じられた。改めて四海を見渡すと憲法が作られた頃とは情勢が大分変わってきてゐる。「国守る」も何かの信号が桂子さんのアンテナに引っかかったのであらう。

須賀 敏子

祝日の航空公園初音聞く
暮つ方潜る潜るや鳩
凜として淋しさもあり白椿

◎航空公園の正式名は「所沢航空記念公園」。日本で初めて飛行場が作られた場所。この駅はわたしもよく利用した。公園に置かれてゐるYS11は思ったより小さく見えた。その脇を通つていそいそとコンサートに通つたものだ。元飛行場だけあって広い。其処にさまざまな施設がある。句会をした茶室もある。それにしても鶯の声が聴ける公園が地元にある敏子さんが羨ましい。

◎鳩が浮びては潜り潜りては浮び休むことなく小魚取りに忙しい。「鳩は留鳥なので厳密には冬鳥ではないのだが、冬の池沼で目に付くので冬の季節とする」と歳時記にある。中七の澁淵としたリズムと「暮つ方」と古風な云ひ方に作者の狙いが窺へる。潜る潜ると浮いたと一言も言はぬところがおもしろい。

◎赤や絞りの椿と比し、白色の椿は確かに凜としてゐるし、淋しさうでもある。白椿を詠む時に作者は無意識に他の色の椿と比べてゐる。

最近記憶に残った古誹諧がある。「高瀬曳ねこがほ時や白椿 文菊」。この「ねこがお時」が分からず辞書をひいたので記憶に残った。一つに朝起きて顔を洗はないままで仕事などに出かけること。もう一つは夕暮の薄暗いさま、とあった。猫顔時の白い椿は印象的。掲句はこの文菊の句とは違ひよく見て、理で納めた。

赤座 典子

俯きて揺る三極の蕾かな
湯へ通ひ少し話して春夕焼
春浅し湖上花火の檸檬色

◎空に向いて咲く花があるかと思ふと、三極や臘梅のやうに俯いて咲く花もある。どう云ふ意味があるのだらう。虫からみれば俯いて咲く花は面倒くさいのでは。三極の寄せ合つて咲く姿は「揺る」と云ふイメージはないが、観察眼の鋭い作者がさう見た。来年じっくり見て見やう。

◎「湯へ通ひ」は銭湯ではなく湯であらう。「少し話して」が少々飛躍してゐる。出で湯で出逢つ

た知らぬ人とのお話であらうか。湯上りの夕焼けは湯治でなければ味はへぬ贅沢だ。

◎花火大会は河や湖などの水の上で開かれる。花火には出にくい色があると聞くが、何色かは知らぬ。檸檬色はだうなのだらう。季節外れとも思へる浅春の花火大会には檸檬色は似合ふと思ふ。

篠田 大佳

窓際のセロハンテープ春きざす

うららかやバス待つ二分長かりし

マフラーで言葉をふさぐ少女かな

◎物質に季節を感じる、一方的で理不尽なことだが嫌ひではない。だがそのことを共有できるか出来ないかは別。外界との接点でもある窓。その窓際に置かれた透明？なセロハンテープに春の兆しを覚えることはさうであらうと共感できた。

◎「うららか」と「二分長かりし」とぎくしゃくした言葉のやりとりがおもしろい。心の持ちやうで一時間二時間でも短く感じる時もあるものだ。ベルクソンを持ち出すまでもない。

◎きつとマフラーに深々と埋まってゐる。「少女かな」はわたしにはすっかり消えてしまった感情だ。初々しい作品。

秋川 泉

夢見月瑠璃の世界に誘はれ

春庚子閏年なる懸想文

民話聴く北の浜辺の二月を

◎夢見月は陰暦三月のことで実際のお月様を指してゐるわけではない。ないのだが欺されてしまふ。今年三月二十四日から四月二十二日までが夢見月。霞がかかった朧月をこの言葉から連想する。泉さんも夢を見たやうだ。わたしもその夢に誘はれてしまった。辞書に「桜散る初瀬の山の夢見月 嵐の花の雪の中宿」。隣の項目に「夢見鳥」蝶の異名とか。

◎懸想文はラブレターのことかと思つてゐたら、違ふ意味もあつた。「近世、正月に京都の町などで売られたお札。艶書に似せて、縁起を祝う文句が書いてある。「季」新年。」十千十二支に疎いわたしにも句意に辿り着けたやうだ。

◎民話と云へば遠野と刷り込まれてゐる。「北の浜辺」といふのでさう違ひはないはず。「二月を」をどう声を出して読もうか迷ひ「きさらぎを」と読んだ。

中川句寿夫さんをしのんで 九

一本は庭にさし込む稲架支へ
 板垣の釘のゆるみや春隣
 竹藪に日輪淡し穴まどひ
 朝市に売る楽しみの大根洗ふ
 石垣の潮じめりして石露咲けり
 雪囲ひ解けば夕日がまともにて
 寒鯉のゆらりと水に戻さるる
 梅雨の妻意外なことを聞いてくる
 朴の芽がほぐるる童話読むやうに
 父看取る更に遠くの夕蛙



『あを』最初の投稿に「水漬や門下と言ふもをこがましい」と。面はゆく思った。句寿夫さんの句は何処を切っても佳汁がしみ出てくる。「梅雨の妻意外なことを聞いてくる」は愚妻を思ひ出してしまった。「朴の芽がほぐるる童話読むやうに」とナイーブな面も勿論ある。しかし、ここ一番となるとうまみ、をかしみを押さへてつくる。「父看取る更に遠くの夕蛙」にはほとほと感じ入った。皆さんもさうだったことですが十句抄するのは無理な注文をしたものだ。彼に拙句への注文を聞きそびれたのが心残り。

佐藤喜孝 抄

大日向幸江

きさらぎの水道水に刺のあり
 永い旅始める覚悟蝶々に
 干瓢を水に戻せり雛祭り

◎水道水そのものに「刺」を感じたのではなく、きさらぎの頃のまだ冷たい水ゆゑに刺と感じられた。幸江さんの鋭い感覚で季節を捕らえた一句。

◎「長い」と違ひ「永い」は重たい。覚悟の句には言葉は要らないが、下五の「蝶々に」で俳人としての覚悟が聞けた。

◎前の二句からこの句になって息がつけた。雛祭のご馳走が匂ってくる。ワープロで「まつり」と打ち変換すると「祭り」となる。これが嫌ひで辞書登録から削除するのだが今だに消えない。掲句なら「り」は送らない方がすつきりする。少数意見だが。



万年筆

秋川 泉

筆記用具の思い出は心痛む。父が入院していた時、私愛用のペリカン万年筆を貸して欲しいと何度も云った。しかし、私は万年筆の書き味が変ってしまうと思ひ「嫌」と言い張った。そして、とうとう貸さなかつた。父が病深くなる頃、純金の素晴らしい万年筆を購入したから死んだらお前にやるよと云つた。私は「いらない」と答えた。まもなく本当に父は遷化した。父は万年筆にこだわっていたのだ……と後で思つた。それから私は万年筆を止めて筆ペンを愛用するようになった。今でも申し訳なく心が痛い。

ボールペン

佐藤喜孝

小学校に学校図書館があつた。図書カードに名前を記入して借りるシステム。どんな本を借りたのか記憶にないが、買つてもらつたばかりのボールペンで記入しやうとした。図書係に鉛筆で書かなければと注意されたが耳を貸さずその頃は珍しかつたボールペンを使った。強引に使つたボールペンのボールが外れ図書カードをインクで汚してしまつた。その後だうしたか覚えてないが今でも忘れられない。このボールペンは鉛筆の芯をボールペンの替え芯に替えただけの簡単な作り。ネットで調べたら「オートボールペン工業が一九四六年に鉛筆型ボールペンの「オートペンシル」を他社に先駆けて発売」とあつた。昭和で云へば二十一年の事。ボールペンの先端のボールとそれを保持する機構は難しいものらしい。月の裏側へ着陸させることが出来る中国でも、二〇一六年に自国生産出来たと聞く。わたしの毀れたボールペンも初期の精度の欠いたものだらう。

あをキーワード俳句辞典(ひらひら)

日裏

今日明日日裏に揺るる猫じゃらし

佐藤 恭子

日枝

馬冷やす坂下門や日枝祭

篠田 純子

日面

日面ををどり出くるふ冬のカバ

佐藤 恭子

日面をゆらり翳らせ黒揚羽

鎌倉喜久恵

日面の南天めでて裏木戸へ

芝宮須磨子

日面やどこにも見えぬ雪達磨

赤座 典子

ピオラ

屈込み弾切るピオラ冴ゆるかな

赤座 典子

控

ポランティアの控の小部屋徹臭し

篠田 純子

控え目に若女将みて鉦叩

須賀 敏子

マーメイドの甘さ控え目夏初め

鎌倉喜久恵

松籟に少し控へ目蟬時雨

長崎 桂子

夏菊の艶は控へ目午後すがし

長崎 桂子

非核

山櫻非核三原則自爆

篠田 純子

颯

野つばらの春颯につきささる

篠田 純子

まんさくの花颯の痒くなる

須賀 敏子

颯にひつつくスカート蝌蚪の池

須賀 敏子

颯に水の影ろふ黒日傘

露けしや颯濡れてゐるやうな

日影

初日影新車を包みハイウエー

松本 米子

神田川日影日陰に残り鴨

芝宮須磨子

草の名は河原決明夏日影

佐藤 喜孝

禅林に駐車場あり秋日影

鎌倉喜久恵

軒下になんでも吊す冬日影

篠田 純子

木造の三階建の冬日影

篠田 純子

いつまでも芒とイフ鷺春日影

佐藤 恭子

お砂場で吸鉄石を春日影

佐藤 恭子

日陰

日陰より藜なき露の匂ひくる

渡辺 友七

日陰濃く八手の花の珠あはし

長崎 桂子

ひなたの香日陰のほひ柿の村

佐藤 喜孝

冬萌や日陰の水の急ぐなり

渡邊 友七

急けたし日陰に霜のまだ残る

定梶 しよう

日の鴨と日陰の鴨と入替る

芝 尚子

長屋門大き日陰に猫一匹

早崎 泰江

西行堂狛犬に乗る日陰雪

赤座 典子

遅れけり日陰木かげを辿り来て

森 なほ子

草摘むやこごめ柔らか半日陰

須賀 敏子

あとがき

コロナウイルス

三月四月と旬会が休会。五月も確実。暗い面ばかり見てもしかたがない。わたしのやうにひとり暮らしが平常の者にはなんら変はりはないやうだが、さうでもない。買物に行くのと店や店員の緊張が伝はる。新学期が始まって学校へ行けない子と暮らす親も子も大変。孫は野球が出来ずエネルギーの発散はだうしてあるのか。エイマはお絵描きと任天堂の『あつまれどうぶつの森』で暇がないさうだ。お向かいの家に二人の子がある。お父さんが帰宅すると子供たちと道路に出て声を出して遊んでゐる。むかしに戻ったやうでわたしも遊ぶ声を楽しみにしてゐる。

日本の危機管理がおざなりであったことが露見した。マスクも人工呼吸器も外国で作られてゐた。感染対策は日本は後進国とか。食べ物の自給率も上げなければと云はれて久しい。コロナが収まったら日本の危機管理をアメリカや総理一人に任せず国民ひとり

ひとり考へるよいきっかけになるかも知れない。

マスクとは冬の季語だとかたくなに 大久保白村

題詠シリーズ「紅」

マイペースのこのシリーズも『紅』で九回目。次回は「柱」です。コロナウイルスで籠もりがちな日々、三十句挑戦してみてください。一二割残れば御の字とゆったりと作って下さい。追って締切日をお知らせします。(喜孝)

二〇二十年四月号

発行日 四月二十五日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)